
豆乳女と栄養ドリンク男

シュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

豆乳女と栄養ドリンク男

【Nコード】

N9554X

【作者名】

シュウ

【あらすじ】

豆乳が好きな女と栄養ドリンクが好きな男の話です。

豆乳はからだに良い。

栄養ドリンクはからだに良い。

つまりこの物語はからだに良い。

どんな理屈かはわかりませんが豆乳も栄養ドリンク もからだに良
いはず。

そう信じてやまない二人の物語。

どうぞご覧あれ。

豆乳女・高倉真琴のプロローグ（前書き）

主人公女・高倉真琴の話です。

豆乳女・高倉真琴のプロローグ

豆乳はからだに良い。

だって大豆イソフラボンが入ってて女性ホルモンが増えるらしい。それによって乳ガンとかの予防になるらしい。

とにかく豆乳はからだに良い。

私は豆乳が大好きだ。

私が豆乳を飲むようになったのには色々理由がある。

それをちよつとお話させてください。

あれは私がまだ小さかった頃、学校の友達に胸が小さいことをバカにされた。

思い返してみると、まだ一桁年齢の時期に胸がどうのとバカにされても困る。だって成長期前だったんだもん。

それでも私は、幼心なりにかなり悩んでいた。それはもう図書室で調べたり、お母さんに聞いたり、近所のお姉さんを訪ねたりした。そういえばお父さんには、

「これは女の子の問題なの！男の人は来ないで！」

「母さん！ついに真琴^{まこと}が反抗期だよー！」

「お父さんには関係ないことよ。むしろ関わってはいけません」

って、お母さんに泣きついてたなあ。

お父さん、ごめんね。

巨乳化計画を開始した翌日、

『牛乳には胸を大きくする力がある。』

とお母さんが言っていたので、早速牛乳を飲んだ。

しかし、私は牛乳を飲むとお腹を下すタイプの人間だったみたいで、牛乳デビューは巨乳化計画を台無しにした上に、牛乳嫌いという素晴らしい称号を与えてくれた。牛乳のバカヤロー。

だがしかし。私はあきらめなかった。

馬鹿にされたからという理由は多分忘れていたと思う。

ここまでできたら意地でも牛乳を飲んでやる。

・・・そう。私は馬鹿だった。

可愛い幼心にはもはや巨乳化計画などなく、牛乳のことしか頭になかった。

ここから巨乳化計画は牛乳克服計画へと移り変わる。

まず考えたのは牛乳がダメならヨーグルトだ。

次の日、お母さんにお願いで買物について行った。

素直にお願いでしてもお母さんには断られると思った私は、カートの上にあるカゴの中にヨーグルトを内緒で入れようとした。

しかし私の身長ではまだカゴには届かない。

その時、お母さんは何も言わずにカゴの中に、私の持っていたヨーグルトを入れてくれた。

家に帰ると早速ヨーグルトを食べようとしたら、お母さんに

「ご飯前に食べると胸が縮むよ？」

「!?!」

私はおとなしく座っていました。

そして待ちに待った食後。

冷蔵庫の一番下の野菜室の中からヨーグルトを出した。

お母さんが取りやすいようにつけて野菜室に入れてくれたのはいい思い出だ。

そして行儀良く椅子の上に正座して食べた。

ほどよく冷えていて美味しかった。

特に何か変化があるわけもなく、いつものように家族三人で川で寝た。

午前5時半。起床。

隣で寝ていたお父さんを叩き起して冷蔵庫から牛乳を飲む。もちろん変わっていない。ただお腹が痛くなるだけだった。

「なぜだ・・・」

幼い私は、『ヨーグルトを食べる＝牛乳と同じ効果が現れる＝牛乳を克服！』という方程式が出来ていた。

つまりヨーグルトを食べると牛乳が飲めるようになると勘違いしていたのだ。

さすが幼き頃の私！バカ！

シヨックを受けた私はお腹が痛いのを理由に学校を休んだ。

その日はお腹が痛いため寝るに寝付けず、テレビばかり見ていた。

朝の情報番組にはじまり、名作アニメ劇場、通販番組、お昼の経済ニュース。

すごいつまらなかった。

そして今の私を作ったお昼のワイドショーの時間が来た。何気なく、椅子に座ったお母さんとテレビを見ていた私。

『今日の特集は女性ホルモンについてです』

そのとき私は近所のお姉さんの話を思い出した。

「たしかお姉さんはじょせいホルモンが足りないから胸が小さいって言ってた」

その特集の中では女性ホルモンについて事細かに語っていた。もちろん幼い私にはわかるわけもなく、奥様向けの特集は終わった。しかしその時の私は紹介されたひとつの食品に興味を示していた。

「お母さん！とうにゆうってなに？あの白いやつ牛乳？」

「牛乳じゃないけど豆のお乳って感じね」

「豆も生きてるのか！」

「飲んでみる？」

「うん！」

その後買い物に行った私とお母さんは、豆乳と夜ごはんの材料を買って帰った。

夜ご飯を食べた私は昨日と同じようにヨーグルトを食べて寝た。

翌朝5時。起床。

隣で寝ていたお父さんを叩き起し冷蔵庫から豆乳を出してもらった。目をこすりながらお母さんも起きてきた。お父さんがケータイのカメラを向けていたからピースした。そして豆乳を飲む。意外とうまい。

学校へ行く。なんで休んだかみんなに聞かれる。帰ってくる。お母さんに聞かれる。

「どうだった？」

「お腹痛くない！」

しかし牛乳を飲むとお腹が痛くなるのは治っておらず、その日から『打倒牛乳！』を目標して豆乳を飲み続けたら、豆乳が手放せなくなるぐらい好きになっていた。

その日から私は豆乳が好きだ。

豆乳女・高倉真琴のプロローグ（後書き）

長い文章を読んでいただきありがとうございます。

なんやかんやで不定期更新ですが、早め早めに書いていきます。

感想とかあれば書いていただけると執筆意欲が高まります。

これからもよろしく願います。

栄養ドリンク男・佐々木和のプロローグ(前書き)

主人公男・佐々木和の話です。

栄養ドリンク男・佐々木和のプロローグ

栄養ドリンクはからだに良い。

だってあんなに滋養強壮とか疲労回復とかしてくれるんだ。からだに悪いはずがない。

だから俺は栄養ドリンクが好きだ。

俺が栄養ドリンクを飲み始めたのには色々ある。

語ってもいいか？

まあ答えは聞いてないけど。

あれはまだ俺が小さかった頃の話だ。

確か中学生ぐらいの頃だ。

あの頃はやんちゃだった。

授業前にジュースを買ってきて授業中に隠れて飲んだり、勉強道具を机の中に入れっぱなしにして帰ったりもした。

授業のノートには謎の英語が書かれていたり、謎のマークが書かれていた。

ノート提出の時に消すのを忘れて先生から『佐々木くんは絵が上手ですね』とコメントがあったりもした。

俺は茶髪にしたりとか、学校をサボったりという低レベルでナンセンスなことはしなかった。

俺が世界の中心。俺が世界を回しているんだ。

きっと明日になれば宝くじが当たるよりもすごいことが俺の身に降りかかってくるだろう。

常にそんな気がしていた。

・・・あの頃の俺はバカだった。

あの頃、掃除当番で机を動かしてた時に、不良組のやつの中身を落としてしまってビクビクしながら片付けたのはいい思い出だ。

そんなこんなでちょっとやんちゃ（笑）だった頃、俺はからだが弱かった。

別に持病を持っていたとか心臓に負担を抱えていた訳ではなく、ただ単に病気になるやすかつただけだ。

あの頃の俺にとっては、

「世界が俺に課した試練なんだ」

とかなんとか思っていたに違いない。

常に制服の内ポケットには何かの薬が入っていた。

偏頭痛持ち、時々くる腹痛、ちょっとした微熱。

全てが魅力的な症状だった。

そんなある日。

学校帰りに、前を歩いていたサラリーマンっぽい男の人が、ビニール袋いっぱい栄養ドリンクを入れてオレンジ色の看板のコンビニから出てきた。

「そつえば栄養ドリンクってどうなのかな？」

健全でやんちゃな俺は栄養ドリンクは大人の飲み物だと思っていた。あれは大人が飲むものだ。だから今の俺にはまだ早い。

そう言い聞かせながらコンビニに入り、栄養ドリンクコーナーの前でいろいろ見ている。

一本3000円するのもあった。

「なんだこれ。めっちゃ高いし」

中学生にとっては3000円は大金である。その頃の俺も例外ではない。

母親から毎月もらう5000円のお小遣いをやりくりしながら友だちと遊んだりしていた。

「ん？」

そこでふと目に止まった商品。

『エナジードリンク・イエローブル』

青い缶に黄色い文字で陳列されていた。

値段はなんと200円。

「破格じゃないか！これをたくさん買ってこのコンビニを潰してやるっ」

そんなことを思いつつ、イエローブルを3本も買ってコンビニを後にした。

家に帰るなり、部屋に入り飲んだ。

意外と美味しかった。その勢いで3本とも飲み干した。ほぼ一気飲みだった。

「なんか疲れが取れた気がする」

プラーシーボ効果とは恐ろしいものである。

そんなにすぐに効果があったら商売上がったり下がったりだ。

疲れが完全にとれた俺は、上機嫌で家族と夜ごはんを食べた。異変が起きたのはそのあとだった。

寝る前にトイレに行きたくなった俺は布団から出てトイレへ行った。誰だって我慢しておねしょはしたくない。

トイレで用を足していた俺は放出されていく液体を見た。

「う、うわぁ!!」

液体が黄色すぎたのだ。それも尋常じゃないくらいに。

若干濃い黄色になるくらいならたまにあつたが、ここまでの黄色は初めてだった。

トイレからなんとか生還した俺は、布団につずくまり少し震えながら寝た。

翌日。土曜日のため学校は休みだった。

昨日のトイレでの一件が怖くて家のパソコンで調べてみた。もしかしたら何かの病気かもしれない。

『尿 黄色』で検索した。

しかし検索しても検索しても『腎臓の病気』や『肝臓の病気』といったようなものばかり。

だんだんと怖くなってきた俺は、一日中布団の中で丸まっていた。夜になって母親が心配して様子を身に来た。

しかし尿の話など母親には恥ずかしくてできない。

「大丈夫？」

「なんでもない!!」

ほぼ半泣き状態で母親に返事した。

母親は何事かと思っただらしく、部屋を出ていった。少しすると仕事から帰ってきた父親が部屋に来た。

布団の横に座った父親は

「なんかあったのか？友達にいじめられたのか？」

普段の明るすぎて気持ち悪い父親からは考えられないような声だった。

「俺・・・死ぬんだ・・・」

びつくりした父親は理由を聞いてきた。

泣きながら話した。

イエローブルの話。トイレの話。病気の話。いつも持ち歩いている薬の話。

いつも薬を持ち歩いているのを知っていた父親は、俺の肩に手を置いて話し始めた。

「いいか和^{かず}。薬のことはいつも言ってるけど飲みすぎはからだに毒だから控える。そしてイエローブルはエナジードリンクって言うてからだを元気にしてくれる飲み物なんだ。だからからだに悪いはずがない」

「でもトイレで・・・」

「あれはエナジードリンクが、からだの中から疲れを出しているんだ。ようは副作用なんだ」

「副作用？」

「そつだ。和も薬を飲んだら眠くなるだろ？あれと一緒にだ」

「眠くなるのは授業がつまらないから・・・」

「そんなバカな。薬を飲まない時の授業はとて面白いはずだ。和は授業の面白さをまだ見つけ出せてないんだ。もう少し頑張ってみる」

そうだったのか。副作用か。だからテストの点数が悪かったのか。

「あと一つ。薬よりもイエローブルのほうがからだに良いぞ」

「!？」

「薬は悪いところを直すだろ？だからマイナスを0に戻すだけなんだ。でもイエローブルはどうだ」

「どうなの？」

「わからないか？0の状態でもからだに元気がみなぎってくるんだ。つまり0の状態からプラスにしてくれるんだ」

その頃の俺には衝撃だった。

そして俺はこの日から薬をやめた。

かわりに毎朝一本イエローブルを飲んだ。

いくらイエローブルでも飲みすぎはからだに毒だと言われたので、

一日毎朝一本だけを守った。

そして現在も毎朝の栄養ドリンクは欠かせない。

あの日から俺は病気知らずだ。病院とか何年も行っていない。

今はもう24歳なので普通の栄養ドリンクも飲んでる。

一番調子を保てるドリンクを探している。

そんなわけで俺は栄養ドリンクが好きだ。

栄養ドリンク男・佐々木和のプロローグ（後書き）

ここまで読んでいただいております。
次は豆乳女です。

こんな感じで交互にそれぞれの視点で書いていきます。
よろしければ今後もお付き合いください。

豆乳女・高倉真琴の生活（前書き）

豆乳女の友達登場

豆乳女・高倉真琴の生活

私、高倉真琴^{たかくらまこと}25歳は豆乳好きである。

健康のためにとかで豆乳を飲んでいる訳ではなく、ただ単に豆乳が好きだから飲んでる。

現在、街の中心部にある書店で社員として働いている。

「はぁ・・・売上落ちてきてるって言われてもねー」

お昼休憩の休憩室で、パックの豆乳をくわえながら、同僚の山田佳子^{やまだよ}と話していた。

「でもまこちゃんのところは一般書籍だからいいじゃん。うちなんか漫画だよ？このご時世何がヒットするか何かわからないって」

「でも得意分野なんでしょ？」

「まあね。かなり勉強したし」

佳子とはこの書店に勤め始めてからの仲だ。

昔の彼女を知らないけど、簡単に紹介するなら彼女はオタクだ。

前からと言うわけでもなく、この書店に務めて漫画担当を与えられた時から勉強をしたらしい。

漫画担当として、漫画に関する知識を得なければ働いていけないということ、いろいろな作品を見たらしい。

とはいえども、そんじょそこらのガッツリしたお店ではなく、一般書籍のお共に漫画も置いてるような書店なので、深い知識は必要ないんだけど・・・

「そついえばこの間のアニメ見た？」

「え？どれ？」

「だから何回も見てって言ってたやつ。シスコン高校生が国を相手に仮面かぶって戦ったりするやつ！」

なぜか向こうの世界に引きずり込まれたみたいで、私を向こうの世界に引きずり込もうとしている。

「いや、私は見ないってば」

「このわからずやが！」

私の目をのぞき込んでくる佳子。

「アニメを見るんだ!!」

「見ません」

「うわー。これで反応しないとホントに見てないんだね」

「なんで嘘つかなきゃならんの」

どんだけのめり込んでるんだ。

一つ目の豆乳を飲み終わつたので、二つ目を開ける。

「あーあ。私にもナイトメアに乗った王子様が現れないかなあ」

「悪夢に乗ってくるの？」

「もういいよ！」

アハハと互いに笑いあつた。

私と佳子は仲が良い。

プライベートでもよく遊びに行ったりもする仲だ。

人見知りな私は、書店勤めが始まった当初、あまり職場に馴染めず
にいた。

お昼休憩も休憩室を使わずに外で食べていた。

3日ぐらい経ったある日、いつものようにお昼休憩で外に出ようとしていた時だった。

「あー！いたいた。高倉さん」

「えーと・・・山田さんでしたっけ？」

「私たち同期だよ？同い年だよ？もつとフレンドリーにいっしょよー」

「え？同い年？」

「うわー。忘れてるし。私ショックだわー」

「なんかごめんなさい」

「別にいいよ。なんか食べに行くの？」

「うどんとか食べに行こうかなーって思って」

「うどん！？なんて色気のないやつ」

「色気！？」

「よしわかった。ラーメンに行こう！」

「ラーメンも色気ないけどねー」

「細かいことは気にしない」

その時から私と佳子の関係は始まった。

彼女は明るくて気さくなかわいい子だった。

私の場合顔見知りとは言っても最初に話かけるのが苦手なだけで、対人恐怖症とかではない。

私が豆乳を飲んでいても全然気にしてない。

「豆乳好きなの？」

「うん」

「私と豆乳ならどっちが好き？」

「豆乳」

「即答かよ」

こんな感じでよく話している。

私にとっては豆乳より好きなものなんてない。
2番目に佳子。3番目に本。みたいな順位だ。

「そついえばまこちゃん、今日このあと空いてる？」

佳子が私に予定を聞いてくるということは・・・

「空いてるけど、荷物持ちは嫌だよ？」

「今日は一緒についてきてほしいだけだって。何も荷物は持たせないからさ」

「ラーメンおごってくれるんでしょ？」

「もちろん！」

「ならば行つてやらんこともない」

「ありがたき幸せ！」

今日は佳子の好きなアニメの何かが発売する日なのだ。

それ関連の日が近づいてくると私の予定を聞いてくる。

しかもきまつてラーメンをおごってくれる。

そのラーメンが美味しいんだわ。

豆乳ラーメンっていつて、豆乳スープの中にラーメンが入ってるんだけど、佳子に連れてってもらってから病みつきになってしまっている。

「じゃあ終わったらいつものところで待ち合わせね」

「イエスマイロード！」

「・・・え？」

豆乳女・高倉真琴の生活（後書き）

ここまで読んでいただき嬉しい限りです。

これから本編スタートとなります。

これからもお付き合いください。

栄養ドリンク男・佐々木和の先輩（前書き）

栄養ドリンク男のターン

栄養ドリンク男・佐々木和の先輩

「よし終わった！」

「佐々木さん。お疲れ様です。」

やっと仕事が終わった。

もうこんな時間だ。急がないと。

俺、佐々木和^{ささき かず}24歳は栄養ドリンクが好きだ。

毎朝一日健康であるために飲んでいたが、いつのまにか栄養ドリンクに惚れてしまっていたらしい。

罪なやつだな。お前は。

「残念なのはお前の頭だ」

「イタツ」

俺は現在、先輩が作ったデザイン系の会社で働いている。

会社といっても小さな会社で、全員合わせても7人しか働いていない。

パソコンでイラストを作ったり会社のロゴとかを作ったりしている。

「なんで叩くんスか」

「お前の頭の中まる聞こえだから叩いて調節してやるうかと思っ
な」

この人がひとつ上の先輩、^{やまだ いちご}山田五郎。

大学時代の先輩だ。とは言っても実際誕生日は1ヶ月しか変わらない。

先輩は3月。俺は4月。でも先輩後輩という関係。

母親ももつちよつと早く生んでくれたら先輩なんて呼ばなくて済んだのに。

こんな古めかしい名前だが先輩は先輩だ。まあそんなことを言ったら先輩に怒られるのは確定だ。

「だから聞こえてるんだよ」

バシツつと叩かれる。

俺は心の声が他人に聞こえるという存在らしい。

かなり前にドラマ化して有名になってしまったが俺は隠すことはない。

・・・そんな馬鹿な。

頭の中で思っていることをついつい口に出してしまうのが俺の悪い癖だ。

きつと先輩が頭を叩きすぎたせいだと思いたい。

「そんなことより和。このあと予定あるか？」

「このあとはちよつと予定が・・・」

「そうか。無いか。じゃあちよつと付き合ってくれ」

「え？いや、予定が・・・」

「大丈夫だ。友達の誕生日が近いからプレゼントを買いに行くんだが」

「いやだから予定があるって言って」

「気のせいだって。予定なんてどーせ本屋に行くんだろ？」

「え、あ、いや・・・本屋ですけど」

「だから大丈夫だって。今日行くのも本屋みたいなところだから」

「えー・・・わかりましたよ」

拒否権はないらしい。

今日、本屋にいけないのはちよつと残念だな。

それにしても先輩がここまで言うのも珍しいな。
買うものってなんだろ？まさかアダルトな本だったりして。
ちよっと楽しみになってきた！

「先輩？」

「よし。行くか」

「え？マジでここなんですか？」

「・・・引いてるか？」

「いや、引いてますけど、先輩こんなところくるんスか？」

「俺の友達のもって言ってたじゃん」

「いやいや、だからって何買うんですか！その人とどんな関係なん
ですか！」

「一人じゃ恥ずかしいからお前を連れてきたんじゃないか」

「なんで俺！」

先輩に連れてこられた場所はアニメショップだった。

そして後ろでニヤニヤしてる女子二人組がいるのはなんなんだ？

「え？お前中二病だろ？」

「は？」

「いや。え？違うの？」

「なんですかそれ？」

「だっていつつも独り言みたいになんかぶつぶつ言ってるし、心の
声がーとか言ってるじゃん」

「え？まじすか？自覚ないですよ？そんなに言ってます？」

「まじかよ。じゃあお前オタクじゃなかったのかよ」

「そんなわけないですよ！」

店から出てきた男子がこっちをすごい嫌そうな目で俺を見てきた。
ところでここは何の店なんだ？
ってゆーか何買っただ？

「先輩。ところで何買っんですか？」

「コードゼアスの主人公の赤の騎士団のフィギュアだ！」

「・・・は？」

栄養ドリンク男・佐々木和の先輩（後書き）

ここまでありがとうございます。

栄養ドリンク男は朝に1本飲まないと体調を崩します。

豆乳女・inn アニメショップ

「うへー。相変わらずすごいね」

「今日はフィギュアの発売日なのですよ！」

なんやかんやで行きつけのアニメショップに到着。

店内はアニメの曲や映像が流れていたりして、周りが全てアニメでいっぱいだった。

私なら一人で来たら、恥ずかしくて帰っちゃうな。

「じゃあまたあとでね」

「うん」

そう言つて上機嫌な佳子の背中を見送った。

佳子が高い物をしている間、私は店内の物色に励む係だ。

係といつてもただぶらついてるだけなんだけどね。

大体、月に2回くらいは誘われる。

まあ私も嫌いなわけじゃないから、知らないのばかりだけど見るのは楽しいけどね。

「このコスプレすごいな」

外人みたいな日本人がコスプレするとすごいよね。

なんのキャラかは全くわからないけどすごいと思う。

カッコイイもん。

「お待たせー」

「あれ？早くない？」

「今日はこれだけだし」

袋を顔の前まで掲げた。

見ると本一冊ぐらいしか入ってないように見える。

「フィギュアってそんなに小さかったっけ？」

「フィギュアは見に来ただけ」

「そうなの？」

相変わらずの笑顔を見せる佳子。

よくわからないけどそーゆーものなのだろう。

佳子がいいならいいや。

「それよりラーメン行こうよ！」

「ちよ、おま、こつちがメインなんですけどー」

「私にとってはラーメンがメインなんですー」

「はいはい。行きましようかお姫様」

「うむ。エスコートしたまえ」

私は従者のようにエスコートする佳子に、胸を張って偉そうに笑いながらついていった。

豆乳女・inn アニメショップ（後書き）

ここまでありがとうございました。
佳子がだんだん暴走しちゃいます。
どうしよう・・・

栄養ドリンク男・inn アニメショップ

結局、先輩の日本語が理解できないまま、アニメショップの中に入ってしまった。

店内はすごかった。

なんて言えいいのかわからないけど、すごかった。

よくテレビで『オタクの聖地・秋葉原!!』なんて言ってるけど、ここも十分すごいと思う。

なんかキラキラした目の大きい女の子が並んでる本だったり、裸に近い格好で横になってる絵柄の枕カバーなんかもあって、目をそらしてしまうぐらい恥ずかしかった。

「先輩もこーゆーの好きなんですか？」

「いや、よくわからんけど嫌いじゃないよ」

なんか先輩の意外な一面を知ってしまった気がして申し訳なかった。独り言は控えるように努力しよう。

「なにが申し訳ないだ。友達のプレゼントだっていってるだろうが」

また声にだしてたらしい。

気をつけようがないぜ。

「で。どれなんです？なんとかなんとかって」

「コードゼアスな。まあ予約してるからレジに直行さ。そのへんで待ってる」

「待ってるって…」

こんな無法地帯に放置されても困る。

先輩め。みんなにバラしてやる。

とは言っただものの何をしていけば良いのか。

とりあえず本でも見てみるか。

ん？この本見本って書いてる。暇だし読んでみるか。

3分後

なんだこれ！めっちゃ面白いな！

オタクって言うもんだからってつきり美少女ばかりかと思ってたら、

こんな普通のギャグ漫画まであるのか。

「お待たせ。ってなんだお前。きもいな」

「あ。先輩。これめっちゃ面白いですよ！」

「ん？ああこれか。俺も読んだわ」

「持つてるんですか!？」

「いや、友達に借りた」

「このまま買ってみようかと思ってるんですけど」

「あー・・・今日は付き合せちゃったしな。このあと友達に会うんだがお前もくるか？そこで借りれるかどうか聞いてやるよ」

「いいんですか？だって誕生日って」

普通誕生日と言えばパーティ⇨仲のいい人たちで集まる⇨よそ者は帰れ！

「俺なんか行ってもいいんですか？」

「別に問題ないだろ。二人でラーメン食べるだけだし」

「ラーメンですか？」

誕生日にラーメンとは珍しいな。

ケーキとか買ってたほうがいいのか？

ってゆーかラーメンって聞いたたらお腹減ってきた。

「どうせ誕生日だからって俺が奢らされるんだし、お前の分も奢ってやるよ」

「じゃあ行きます」

「現金なやつめ。じゃあ行くか」

先輩が奢ってくれるなんて珍しいからな。
気が変わらないうちに奢ってもらおう。

豆乳女・ラーメン女

「いらっしやっせー」

ここは私と佳子の行きつけのラーメン屋さん。

そして私の愛しの豆乳ラーメンを扱っているお店。

ここ以外でこんなに素晴らしいメニューを扱っているラーメン屋さんには知らない。

空いているカウンター席に座ると佳子に止められた。

「あ。こっち座ろうよ」

ボックス席に座ろうと言われた。

「でもいつもこっちじゃん」

「今日はこっちの気分なのー！」

「わかったわかった。わかったから騒がないで」

なんでこっちなんだろ？

そう思いつつも豆乳ラーメンが食べられればそれでよかった。

店員が注文を取りに来たのでいつものように豆乳ラーメンを・・・

「まだ連れが来るのであとで注文します」

「連れ？」

「実は今日は来客があるんですよ！」

「ちよつと！私聞いてないんだけど」

「だって言っていないもーん」

「もーんじゃなくて言っつてよ。なんで言っつてくれなかったのさ」

「言っつたらまこちゃん来ないじゃん」

「当たり前じゃん」

「ここは嘘でもいいからちよつとくらい悩んでよ」

「そういうことじゃなくて！・・・わかった。落ち着きましょう」

「そうだよ。素数を数えて落ち着こうよ」

よし。落ち着こう。意味不明な佳子を無視して落ち着こう。

えーと内緒で合わせたい人が居るって言ってたから・・・

ん？もしかして・・・彼氏？

そつえば最近そーゆー話してなかったよつな気がする。

佳子もわざと避けていたんだとすればつじつまがあつ気がする！

「佳子。もしかしてかれ・・・」

「いらつしゃつせー！」

「あ！きたきた。おーい！こつちこつち！」

「おう。つてなんでお前一人じゃないんだ？」

「えへへー。連れて来ちゃつた」

「マジかよー」

「五郎だつて友達連れてきてんじゃん」

「まあそこはおあいこつてことで」

佳子に答えを聞くよりも先に、答えが来てしまつた。

佳子が手招きすると、二人の男性は並んで座つていた私たちの向かいに並んで座つた。

どつちの人が彼氏なんだろ？

二人ともスーツを着ている。

佳子と話している人は、背が高くいかにもイケメンという空気を醸し出している。

もう一人は短髪で愛想のよさそつな顔をしている。イケメンよりは低いけど、多分175cmぐらいはありそつだ。つてゆーかこの人どつかで見ただことあるよつな気がする。

「おい。紹介しろよ」

イケメンのほうに催促されて、忘れていたかのように私を紹介する佳子。

「こちらは私の同僚で高倉真琴。まこちゃんて呼んでね」「ちよつと佳子!」

初対面の人にいきなりまこちゃんなんて呼ばれたら、会話が成立しないよ。

佳子の腕をつかんで抗議。

「高倉真琴です。よろしくお願いします」

「こちらこそよろしくね。高倉さん。俺は山田五郎。んでこっちが」「佐々木和です!よろしくお願いします!」

「よ、よろしく」

佐々木さんの声が思っていたよりも大きくてびっくりした。この人も人見知りなのかなあ?

豆乳女・ラーメン女（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

なにげに毎日投稿出来ていたのですが、さすがに難しかったです。

のんびりと続けていきたいと思っています。

気に入ったらお付き合ってください。

栄養ドリンク男・緊張男

「佐々木和です！よろしくお願いします！」

先輩の友達が待っているというラーメン屋に来た俺は、今まさに自己紹介をしていた。

「よ、よろしく」

ドン引きされてるし・・・

そりゃあんな大声で挨拶したら誰でも引くよなあ。

でもこれは先輩が悪いんだ。

そうだ。こんな形で俺とあの人・高倉さんを合わせるから悪いんだ！

この会社に勤め始めて少し経った頃。

俺は先輩に「お前はもつと本を読め！読解力がなさすぎる！」と言われ、近くの書店に来ていた。

本を読めと言われたものの、どれを読めばいいのかわからない。

それ以前に書店に来るのが初めてだった。

どうせ選ぶなら面白い本がいいんだろうけど、どの本が面白いのかわからない。

あれ？面白いつてなんだ？本を全然読んだことがない俺でも面白い本ってなんだ？

抜け出せない迷路にいるような感覚だった。

その時。

「何かお困りですか？」

ふいに横から声をかけられた。

店員が困っていた俺を見かねて声をかけてくれたみたいだ。

「あ。ちょっと読みたい本がなくて」

店員の顔もろくに見ずに話した。

「そうですか。普段どんな本をお読みになるんですか？」

「実はあんまり本は読んだことがなくて・・・」

「そうですか・・・」

こんな人が来たら店員も困るよなーと思っていた。

「じゃあ私のおすすめとかあるんですけどどうですか？」

は？と思つて顔を上げて店員を見た。

女神だった。満面の笑みで微笑む彼女を見た瞬間、胸が締め付けられたのがわかった。

しかしここは公共の場。

心の中で悶える自分を必死に押さえつけながら表情を保った。

「おすすめですか？」

「はい。読む本に困ったときは人のおすすめを読んでもみるのもいいですよ」

「じゃあそれ読んでみます」

「ありがとうございます。ではこちらへどうぞ」

彼女に付いていく俺。

そのおすすめの本がある棚まで来ると彼女は言った。

「なんかぼんやりとこんなのがいいなあとかってありました？」
「いえ。面白いのをもって探してたらよくわからなくなっちゃって」
「そーゆーときありますよねー。あ、これです」
「『正直者の目』って推理小説ですか？」
「はい。シリーズものの第一作目なんですけど、主人公の探偵がすごい万能で面白いですよ」

面白って十人十色だよなあ。

「あ、でもその特技の使い方が色々間違っていて『そこでそれ！？』って感じが笑えます」

笑えるのか。なんか面白そうだから買ってみるか。
この店員さんがおすすめるんだから間違いはないだろう。
かわいいし。

「じゃあこれ買ってみます」

「ありがとうございます」

これから俺はこの書店に行くようになった。

雨の日も風の日も買うものがある日もない日、ただ影からあの人を見ているのが楽しかった。

我ながら不純な動機ではあるが、仕方がなかったのだ。

あの人を見ているだけで幸せだったのだから。

ある日先輩と居酒屋で飲んでいたときに、すっかりこの話をしてしまっただ。

自分のバカヤロー！

そして今に至る。

緊張しすぎて自己紹介が悲惨になってしまってももう取り返しがつかない。

第一印象悪すぎだろうなあ・・・
ってゆーか先輩の知り合いだったなんて。

「これ。言われてたやつな。買いに行くの恥ずかしかったんだからな」

「おお！ついに私の手元に零様がギターー！」

先輩がプレゼントを渡すと袋から出して友達は叫んだ。

「落ち着け。悪いな、和。こいつがさっき言ってた友達の山田佳子」

「山田？妹さんですか？」

「大学の同期。山田なんてよくある苗字だろ」

「私と五郎は苗字が同じだから仲良くなったんだよね？」

「まあそんなところだな。よく家族に間違えられたよな」

「あつたあつた。一時期、『双子ですけどどなにか？』って流行ったよね！」

「懐かしいな」

「ねえ佳子。ラーメン食べようよ」

思い出話に花を咲かせている二人の間に高倉さんが割って入った。

栄養ドリンク男・緊張男（後書き）

ここまでお読みいただきありがとうございます。
よろしければ感想とか書いていただけると嬉しいです。

では次回もお楽しみください。

豆乳女・豆乳ラーメン女

私は限界だった。

知らない人が二人もいる空間でなにもしないで、ただ座っているのは限界だった。

そしてお腹が減っていた。

豆乳ラーメンのために、ここまでの道のりでは豆乳を飲まないでお腹を空かせてきたのだ。

「さあ、皆さん。なに食べます」

私は豆乳ラーメン一択なのでメニューを向かいの二人に渡す。

「俺は味噌しか食わないからお前見るよ」

「えーと。何が美味しいんですかね？」

「お前・・・そのくらい自分で決め」

「豆乳ラーメン美味しいよ！！」

「・・・え？」

やってしまった。

隣で佳子が隣で馬鹿笑いしている。

好きなものを薦める時、私はテンションが上がってしまう。

「豆乳ラーメンってなんですか？」

「珍しいだろ？」

「あ、はい。って先輩はこの店知ってるんですか？」

「知ってるも何も」

「私と五郎は大学の頃からよく来てるもんね！」

「ん？ああ。そうだな」

山田さんの話を遮るような形で佳子が言った。
よっぽど仲良いんだなあ。

「で、なんなんですか？その豆乳ラーメンって」

「文字通り豆乳のラーメンだ」

「なんならまこちゃんに語らせようか？」

「ちよつと佳子っ！冗談やめてよ！」

「はいはいわかりましたよー」

これは全然わかってない。

「そんなに気になるなら食べてみたらいいじゃないか」

「そうします」

というわけで、山田さんが味噌、佳子がじゃがバターコーン、私と佐々木さんが豆乳ラーメンを注文した。

「ごちそうさまでした！めっちゃうまかったです！」

「おう！そうかそうか！うちの真琴が薦めたラーメンなんだから美味しさに決まってるさ！」

「おごつたのは俺なんだからまずは俺だろ」

アハハハと笑いながらお店を出てきた。

この頃には私も二人に慣れてきていた。

「そういえばなんで私を連れてきたの？」

忘れていたが、今思い出して佳子に聞いてみた。

「え？特に理由はない！」

「ええ！？」

「なんとなく五郎に会わせようかなーって思ったから連れてきた！」

相変わらずの気分屋というかマイペースというか。

そこが佳子のいいところでもあるんだけどね。

「あ。そういえば。佳子さん」

佐々木さんが思い出したかのように佳子にたずねた。

「あの・・・あれ？なんてタイトルでしたっけ？」

「あれか。『通常』だな」

「『通常』がどうかしたの？」

「こいつが貸して欲しいんだってよ」

「はい。さっきアニメショップで読んでたら意外と面白くて」

「ふむ。君はなかなか見どころがあると見た。よし。お姉さんが貸してあげよう！」

腕を組んで偉そうな態度の佳子。

「で、どつちかって貸せばいいの？」

豆乳女・豆乳ラーメン女（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

感想とかあれば書いていただけると執筆意欲が高まります。

栄養ドリンク男・オタク入門？（前書き）

あれから4日後です

栄養ドリンク男・オタク入門？

「おい。和。終わりそうか？」

「あ、大丈夫です」

「あいつ、自分は遅刻するくせに他人の遅刻は許さないから気を付けてよ」

「俺はいつでも10分前行動する男なので問題ないですよ」

今日は仕事のあとに、約束していた漫画を借りるために佳子さんと会う予定になっている。

本当は先輩も来る予定だったんだけど、外せない用事があるとかで一人で会いに行くことになった。

「よし終わった。じゃあ先輩。俺お先に失礼しますね」

「おう楽しんで来いよ」

「みなさんもお疲れ様でした」

「おつかれー」

俺は時間に余裕を持って間に合うように、少し早足で歩いた。

待ち合わせ場所は駅前の広場。

待ち合わせの7時まであと30分もあった。

うーん・・・よし。コンビニだ。

待ち合わせで時間が空いたときは、コンビニを探して時間を潰すのがいつもの俺だ。

今日も例によって、近くのオレンジ色のコンビニへと入る。

ラジオのCMみたいなBGMを聴きながら、入口近くの栄養ドリンクコーナーへと足を運ぶ。

「今日はケンユルにしよう」と

なんとなく気合を入れたくて、500円の栄養ドリンクを手に取り、レジで会計を済ませる。

外に出てキャップを捻り、腰に手を当て一気飲み。

「プハー！」

「君はおじさんかね」

「うおっ！」

不意に横から声をかけられて、驚いてそちらを見ると、紙袋を抱えた高倉さんが立っていた。

え？なんで？なんで？？

「今日は佳子が急な残業で来られなくなったので、私が代わりにきたってわけです」

え？それってあり？

「あり・・・じゃないかな？それとも佳子が良かった？」

「うお！また心の声が・・・いえ！全然！高倉さんのほうがいいです！」

「それは良かった」

そう言って笑顔になる高倉さん。うん。綺麗だ。

この間のラーメン屋での出来事で、高倉さんは意外と物事を淡々と話すタイプの人だということがわかった。

最初は人見知りのせいで緊張していたらしく、うまく話せなかったらしいが、後半はよくしゃべったと思う。

そして俺のことは全く知らないらしい。地味にシヨックでした。

「とりあえずこれ。佳子から」

「ありがとうございます。ってこんなにですか？」

受け取った紙袋を見ると、破けんばかりの量の本が入っていた。

高倉さんが手を離すと、ズシっとかかなりの重量が右手にかかった。

「佳子からの伝言ね」

腕を組んで口元に偉そうな笑みをたたえながら高倉さんは言った。

「お姉さんが『通常』好きな君のために色々チヨイスしてあげました！別にあんたのためじゃないんだからね！だそうです」

「えー・・・結局俺のためなんですかね？」

「さあ？最後のはとりあえず言いたかっただけかもしれないよ」

「佳子さんらしい」

「佳子らしいね」

まさかのハーモニーに二人でアハハと笑った。

「佐々木くん。今日このあと何かある？」

「いえ。何もありませんけど」

「じゃあちよつと付き合ってください？」

「どっか行くのか！？それともデートのお誘い！？」

「ふーん。佐々木くんもお年頃ってわけね」

「また心の声が！」

「心の声？まあいいや。別に捕って食べようとは思ってないわよ」

今日はダメだ。ダダ漏れだな。
無になるう。何も考えずに過ごそう。

「で、どっか行くんですか？」

「ほら。この間は佳子の誕生日だったじゃない？私全然知らなかったのよ。だから誕生日プレゼントを買おうと思って」

「そーゆーことですか。でも俺なんかでいいんですか？」

「むしろ佐々木くん以外には頼みにくいかも」

んんん？

栄養ドリンク男・オタク入門？（後書き）

毎度ありがとうございます。

良かったら感想とかあれば書いていただけると執筆意欲が高まります。

次回もお楽しみに！

豆乳女・栄養ドリンク男と買い物

「ここって・・・」

「いろいろ考えたんだけど、佳子と言えばここかなーって思ったの」
そう。あのアニメショップに来たのだ。

もともと一人で来る予定だったんだけど、佳子がいるのと居ないのとでは威圧感がハンパない。

一人で入るのは無理（恥ずかしい）と判断した私は誰かに一緒に来てもらおうと考えていた矢先、今回のチャンスが巡ってきた。
さっきのコンビニで豆乳も買ったし準備万端！

「高倉さん。何買うんですか？」

「えーと。この間の山田さんの買った赤いやつの仲間を買おうかなと」

「コードゼアスの零の仲間ってどんなやつですか？」

「さあ？多分店員さんに聞けばわかるかと思って」

「意外と無計画なんだなあ」

「失礼な。私はここまでは計画通りに進んでいますよ」

「またか・・・って、俺とここに来ることも計画のうちだったんですか！？」

「それはさつき思いついた」

「結局行き当たりばったりじゃないですか」

「細かいことは気にしない。さあ行くよ」

はいはい、と呟きながら後ろについてくる佐々木くん。
やっぱり誰かいると安心するなー。

店内に入り早速店員を探す。

しかしそこで私の人見知りが生かされた。

「すみません」

「はい」

「えーと・・・佐々木くん。なんだっけ？」

耐え切れなくなつて、つい佐々木くんに聞いてしまった。

「ええ！？俺に振るんですか？」

「お願い！」

「わかりましたよ。あのーコードゼアスの零の仲間のフィギュアつてなんかありますか？」

「コードゼアスですか・・・こちらへどうぞ」

店員さんがフィギュアコーナーへと案内してくれる。

「佐々木くん。ありがとう」

「いや、お礼なんていいですよ。タイトル忘れることなんてありませんって」

「そうじゃないんだけど・・・」

佐々木くんは勘違いしているようだが、私は単に恥ずかしかつただけで、タイトルはちゃんと覚えていた。

店員さんも知らない人だから話しかけるのも一苦労だ。

むしろ話しかけただけでも褒めて欲しいくらい頑張つたと思う。

「このへんがコードゼアスのフィギュアですね」

「えーと・・・」

佐々木くんの背中を小突く。

そーゆーことですか、と呟いて、人見知りのことを悟ってくれたら

しく、私の代わりに話してくれた。

「これってどれが人気あるんですか？」

「大体このへんが主要キャラになりますかね」

「ありがとうございます」

そんなこんなで佐々木くんのおかげで、無事佳子の誕生日プレゼントをゲットできた。

フィグマとかいう手足が自由自在に動くフィギュアの『翼』というライバルキャラのを買いました。

「今日はありがとね」

「いえいえ。でも高倉さんの人見知りにはハンパないですね」

佐々木くんは笑いながら言った。

「ヒドイ。一応気にしてるのに」

「うわ。すみませんでした」

「なんてね。でも今日はすごく助かりました」

「俺も楽しかったです」

二人で丁寧におじぎをした。

お腹減ったなーと思って腕時計を見ると、時刻は8時。そりゃお腹も減るわな。

そう思って豆乳を取り出そうと、カバンに手を入れた。

「なんかお腹減りましたね」

佐々木くんがつぶやいた。

「ちょうど私も思ってたところ」

「なんか食べに行きます？あ、でもおうちの人心配するか・・・」

「私一人暮らしたから大丈夫よ」

「逆に心配しますよ。夜遅くまで出歩いてたら危ないですよ」

「まあそうだけど・・・」

なんかこの話してるうちにすごいお腹が空いてきた。

帰って作るの面倒だなーとか思い始めている。

・・・ひらめいた！

「そうだ。なら佐々木くんが送ってくればいいじゃん」

「え？」

「佐々木くんが送ってくればいいじゃん」

「なんで二回言ったんですか」

「佳子のマネしてみた」

「わかりました。高倉さんがそれでいいなら良しとしますか。どこか行きたいところありますか？」

「今日は付き合ってもらったから、最後くらいは佐々木くんに任せよ」

豆乳女・栄養ドリンク男と買い物（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

感想とかあれば書いていただけると執筆意欲が高まります。

次回もお楽しみに！

栄養ドリンク男・食事

「ほんとにここでいいんですか？」

「だから何回聞かれても答えは一緒だよ。佐々木くん」

今、俺と高倉さんはハンバーグレストランの前に立っている。

特に高級とかでもなく、有名でもない……いや、チェーン店だから有名なのか？

よくわからなくなってきた。

こーゆーのってちよつといいレストランみたいなのところに行くかと思っただけど、高倉さんが「別にどこでもいいよ。あ。あそこにしようよ」みたいな感じで勢いで決まってしまった。

お金なら俺が払うから問題ないのに。もしかして遠慮してるのか？

「え？遠慮なんてしてないよ？」

「あ……ですよー」

「とりあえず入ろうか」

「ですよー」

なんか高倉さんに引っぱってもらってばかりだな。俺。

前を歩く高倉さんについて階段を登る。

「いらつしやいませ。何名様ですか？」

「あ……」

「二名です」

「おタバコは？」

「吸いません」

高倉さんが店員に話しかけられて固まったので、俺が答えた。

今日一日（実際は1時間半ぐらい）高倉さんと行動を共にして分かったことがいくつもあった。

一つ目。『計画性がない』

最初のアニメシヨップの時もそうだったけど、意外と行き当たりばったりな人だ。

それも真っ先に走って行って、崖に落ちてから困っているタイプの人間だ。

二つ目。『興味があるものと無いものの差がはっきりしてる』

豆乳ラーメンの時もそうだったけど、自分の興味があることはすこい楽しそうだけど、どうでもいいときはホントにどうでもいいような口調になる。

でも普段から淡々とした話し方なので、あんまり気にならないところが高倉さんの魅力かも。

最後に三つ目『子供っぽい』

多分本人に言ったら怒りそうなので細心の注意を払う。

嬉しい時はホントに嬉しそうに笑うし、さっき登っていた階段も、少しウキウキしながら軽快に登っていた。

こんな高倉さんがモテないのはなぜだろう？

俺なんかイチコロなのに。

「ここってこんななんだね」

「こんなってなにがですか？」

「ん？内装のこと」

ここのハンバーグレストランもとい、『びっくりゴリラ』は普通の店舗のジャングルみたいな内装とは違い、大きな木の中にあるような内装になっている。

また、ボックス席よりもカウンター席のほうが多くなっているのも珍しい。

「ここ初めて来たんですか？」

「うん。佐々木くんは来たことあるの？」

「まあ何回かですけどありますよ」

「ふーん。なに食べる？」

高倉さんと話をすると、話題がコロコロ変わる。

だがそれが楽しい。

それぞれが注文（もちろん店員へは俺がした）したあと、俺は高倉さんに聞きたかったことを聞いてみた。

「そっといえば高倉さんって豆乳好きなんですか？」

「え、あ、うん」

微妙に聞くタイミングがなかったから聞いただけなのに、高倉さんの反応がちよつと変だ。

乗ってくると思ったのに。地雷だったのかなあ？

「・・・変だよな」

「え？」

「豆乳好きだからって飲みすぎーとか思ってるんでしょ？」

「お、思ってますんよ！」

「またまた。だって私の職場の人たちも『また豆乳飲んでるの？』

みたいにバカにしてくるもん」

「職場は知りませんが、俺は思っていないですよ」

職場は職場。俺は俺だ。

ってゆーか高倉さんがそんなに気にするような人だったとは・・・。

「それに豆乳好きって言ってますけど、俺だって栄養ドリンクが好きなんですよ。毎朝欠かさずの飲んでますし、さっきだってコンビニ

二の前で飲んでるの見たでしょ？あんな感じでよく飲んでるんですよ。だから豆乳ばかり飲んでたって気にしませんって」

我ながら結構な長台詞だったと思う。

「え？栄養ドリンク好きなの？」

「はい。って別に自慢するようなことじゃないですけどね。アハハ」

急に素で返されて恥ずかしくなってきた。

「ふーん。佐々木くんが変わってるね」

「今、自分のこと棚に上げませんでしたか？」

「栄養ドリンク男は黙ってなさい」

「高倉さんだつて豆乳女じゃないですか」

「何を失礼な・・・ぷっ」

「アツハハハハハハ！」

「ハハハハハハ！」

おかしくなつて二人で同時に二人で吹き出した。
高倉さんってこんなに笑うんだなあ。

「お客様。他のお客様もおりますので・・・」

「あ、すみません・・・」

店員が後ろに立っていて注意されてしまった。

「お待たせしました」

どうやら注文した品を持ってきたついでに注意したらしい。

「さ。食べまじょうか。栄養ドリンクさん」
「そじですな。母乳さん」

栄養ドリンク男・食事（後書き）

知ってますからね。ドンキー＝ロバですよ。
わざとゴリラにしてるんですよ。

ここまで書いてて思ったんですが、「オレンジのコンビニ」ってわかりますよね？

地方のコンビニだけど有名ですよな？

ここまで読んでいただきありがとうございます。
次回もおたのしみにー

豆乳女・送ってもらおう

「だめだよ。ここは今日付き合ってもらったお礼に私に奢らせてよ」「いやいやいいですって。俺が奢りますって。ご飯誘ったのは俺なんですから」

レジの前で、奢る気満々だった私に、佐々木くんが奢らせてくれと言って聞いてくれない。

いくら佐々木くんが誘ったと言えども、この状況で奢ってもらうのは悪いと思う。

「じゃあこうしましょう！俺が高倉さんの分を払う。高倉さんが俺の分を払う。それでどうですか？」

「んー・・・まあいいや。そうしましょう」

栄養ドリンク男のくせにいいこと言うじゃないの。

と、心の中でつぶやいてみる。

それにしても栄養ドリンク男なんて言葉使ったの初めてかも。

いやいや、普通こんな言葉使わないか。

「いきなり首振ってどうしたんですか？」

「なんでもないよ」

「そうですか。ならいいですけど」

階段を降りきって外に出ると、夜の風が気持ちよかった。

「うわー。なんか気持ちいいですね」

「また私と同じこと考えてた」

「マジすか」

お互いに顔を見合わせ笑う。

お酒が入っていないのにこんなにいい気分なのは久々だ。

「今日はありがとね」

「いえ。こちらこそ。ってこれから送っていくのにもう締めという言葉ですか」

「送ってくれなくていいよ。すぐそこだし」

「近くても夜は危ないですよ。って近いんですか？」

「まあね。歩いて10分ぐらいかな」

「そんなに近いんですか!？」

「だって交通費とか考えたら街中に住んでもあんまり変わらないし」

「だったらむしろ送りますよ」

佐々木くんは意外と頑固かもしれない。

自分が決めたことはあんまり曲げなさそう。

「じゃあお言葉に甘えて近くまで送ってもらおうかな」

「じゃあ行きましようか。どっちですか？」

「ん。あっち」

夜の街を二人で並んで歩く。

初めて会ったときはあんなに緊張してたのに、今はもう仲良くなつてバカ笑いとかするし。

「そういえば初めて高倉さんと会ったのって、ちょっと前ですよね」

「私も考えてた」

「高倉さんつてもつと恥ずかしがり屋で『テヘッ』とかいう感じの人かと思ってました」

「なにそれ!言ってみようか？」

「いいですよ。高倉さんはそんなキャラじゃないってわかりましたから」

「テヘッ！」

「タイミング悪っ！」

アハハと笑う二人。

久しぶりに佳子以外の人とこんなに話してる気がするなあ。

「そういえばその敬語ってどうにかならないの？」

「えー・・・だって高倉さん年上じゃないですか」

「一つしか変わらないんだから別に敬語じゃなくてもいいよ」

「いいんですか？」

「だから私は気にしないって」

「わかりました。じゃあ敬語やめます！」

「よし！頑張れ！」

「・・・って言われても急には治せないですね」

「アハハハハ！地道に頑張りたまえ」

「精進します」

私たちはこのあと笑いながら楽しく歩いた。

結局佐々木くんの敬語は取れなかった。

そんな楽しい時間はあっという間に過ぎた。

「じゃあこの辺でいいや」

「そうですね。今日はありがとうございました。楽しかったです」

「うん。私も楽しかった」

「じゃあまた今度何かあればご飯でも行きましょう」

「うん。その時は佳子も呼んで、今日のお詫びをさせようか」

佐々木くんが笑顔で、そうですね、と言った。
なんか・・・なんかないかな。

私は頭の中で何か話題を探していた。
佐々木くんともう少し話したかった。

こんなに楽しいのは久しぶりだったせいかもしれないけど話したかった。

「あの！」

「あの！」

私と佐々木くんの声が被った。

私は佐々木くんの言いたいことが何となくわかった。

「あ、高倉さんからどうぞ」

「いや、佐々木くんのほうがちょっと早かったから」

「えーと、またご飯誘ってもいいですか？」

やっぱり同じこと考えてた。

「もちろん」

「良かった。断られたらどうしようかと思いましたが」

「この状況で断れるような強い精神を私はもってない」

「今度は奢らせてくださいね。で、高倉さんは？」

「同じ」

「今日こーゆーの多いですね」

佐々木くんは笑った。私もそれにつられて笑う。

「じゃあまた連絡します」

「私も暇なら連絡するね」

「アハハ。じゃあおやすみなさい」

「気を付けて帰るんだよ」

「高倉さんも」

互いにお辞儀をして別れた。

いやーまさかここまで同じこと考えてるとは思わなんだ。

ひよっとして双子なんじゃないか？

頭の中で色々考えていたら、フフフと声に出して笑っていた。

その時、すれ違った二人組の男が声をかけてきた。

「あれえ？お姉さん一人？しかもめっちゃ楽しそう」

「だな！笑ってたもんね！ねえ、よかつたらこれから俺たちと遊ばない？」

豆乳女・送ってもらおう(後書き)

おかしいなあ・・・

コメデイのはずだったのに・・・

次回もお楽しみに！

栄養ドリンク男・忘れ物

まさか次の予定まで立てちゃうとはなあ。

世の中うまくできてるもんだ！

今日は帰りに高い栄養ドリンクでも買っちゃおうかな！

そんなことを考えながら、高倉さんと別れてほんの少し歩いた時だった。

「あつ！！！！」

俺は重大なことに気がついた。

「連絡先知らないや・・・」

今度誘いますって言ったばかりなのに、どうやって誘うつもりだよ！俺のバカ！

高倉さん、まだ外にいるかなあ？

そう思つて来た道を引き返すと声が聞こえてきた。

「ちよつと！やめてください！」

「いいじゃん！俺たちと夜の街にくりだそうぜ！」

「嫌です！」

「そんなこと言わずにさ！」

この声・・・高倉さん？

間違いない。あの直後に絡まれてるのか？

いやもしかしたら違う人かもしれないし・・・

でも嫌がつてるし止めないとマズイよな！

高倉さんじゃなくても助けると心に決めた俺は曲がり角をいそいで

曲がった。

「だから嫌だつて言ってるでしょ！」

「いいから来いよ！」

「あんまり言うこと聞かないなら痛い目見るぞ！」

「おい！何してるんだ！」

大体5メートルぐらいまで走り寄ったところで俺は叫んだ。

「なんだお前？」

「佐々木くん！」

「こいつの知り合いか？」

よく見ると二人とも頭が悪そうな顔をしていた。

服はラップをしてそうなダボダボのズボンにダボダボのジャージを来ている。

「その人を離しませんか？」

さつきまでの勢いを殺すかのような敬語をぶちかましてしまった。

これはこれで自分の頭が冷静だと判断できたので結果オーライだ。しかし二人組は相変わらず怒鳴るだけ。

「ああん？全然答えになつてないじゃねえか！ちゃんと質問には答えろよ！」

「そうだぞ！兄貴の言うことがきけねえのかよ！」

「俺はこの人の知り合いだ。これでいいのか？」

「なんだこいつ！」

「兄貴！こいつ兄貴のこと馬鹿にしていますよ！」

こんな悪役がまだこの世にいたのかと思うと日本は恐ろしい国だと実感できる。

「俺はもう怒った！この女よりも先にこいつをぶちのめしてやる！」
「あーあ。兄貴を怒らせちまったな！兄貴はここらへんじゃ敵なしの人なんだぜ！」

もうだめだ。こいつ。頭の悪さがにじみ出すぎてる。

興味がなくなつたのか、兄貴のほづが高倉さんの背中を乱暴に押した。

そのまま高倉さんはこっちに走ってきた。

「なんで戻ってきたの？」

「第一声がそれですか」

「だってまさか戻ってくるなんて・・・」

よく見ると高倉さんは震えていた。

早くこの場を離れよう。

「あ。じゃあ返してくれたので帰りますね。さあ、高倉さん。帰りましょう」

くるりと背中を向けた。その瞬間バカが叫んだ。

「おい！オメエ！兄貴から逃げられると思ってるのかよ！」
「そうだぜ、兄ちゃん！ただで返すわけにはいかねえよ！」

やっぱりこうなっちゃうのか。

高倉さんもいるから穩便に過ごしたかったんだけどなあ。

兄貴がポケットから折りたたみナイフを取り出してそれを開いた。武器とかズルイ！

「ズルイってなんだコノヤロー！」

そのまま兄貴が突っ込んできた。

「下がってください」

高倉さんに下がるように言うと、俺は荷物を足元に落とし、一步前に踏み出した。

「死ねえ！！」

叫びながらまっすぐ顔面にナイフを突き出してきた。

俺はそれをしゃがんでかわし、しゃがんだままの体勢で兄貴の左足に向かって足払いをかけた。

「うおおっ！」

驚いた兄貴はそのまま横に倒れてしまう。

それを見た俺は確信した。

あのバカが言ってたことは嘘だ。と。

「高倉さん。携帯で警察呼んでもらってもいいですか？」

「え？あ、はい」

後ろで呆然と立っていた高倉さんに声をかけると、驚いたような返事が返ってきた。

やっぱり驚くよなあ……。

俺は高校の三年間テコンドーをやっていた。

たまたまテレビでやっていたK-1の試合で、テコンドーの選手がK-1ファイターに圧勝しているのを見て感動した俺は、近くにあったテコンドーの道場に通うことになったのだ。

その三年間しかやっていなかったが、おかげで動体視力が良くなつたし、からだも柔らかくなった。

今もストレッチとか、キックの練習（ただ綺麗に見せたいだけ。かっこいいじゃん）とかをしているので、顔面へのハイキックとか後ろ回し蹴り程度ならなんなくできたりする。

でも、格闘技やってる人って一般人相手だと怪我させたらいけないって言うじゃん。

それなのに喧嘩を時々ぶっかけられることが高校時代にはあった。なので正直、喧嘩には慣れていた。

そして今回はナイフもってるし仕方ない、と心の中で決めたのだ。

「てめえ・・・俺を怒らせたな・・・」

「怒らせるも何も、そっちが勝手にやってきたんだろ？」

俺は、多分兄貴は格闘技はやっていないと見た。

どうみても格闘技をやっている人の動きではなかった。

それでもなお向かってくる兄貴。

きつと弟分の前では負けられないのだろう。

「俺をバカにしやがって・・・そっちの女からやってやる!」

そう言っただ俺の後ろにいる高倉さんを見ると、さっきと同じようにそのまま突っ込んできた。

俺と高倉さんの前に近づくと、ナイフを振りかざした。

「死ねえ!!!」

高倉さんを狙われたらもう叩きのめすしかない。
俺は兄貴の振りかざした腕めがけて、左足を突き出した。
迎撃するように出された足に対応できず、兄貴は手首当たりを俺の
足に叩きつけてしまう形になる。

その反動でナイフが乾いた音を立てて地面に落ちる。
その音を合図にしたかのように、俺は左足を地面に下ろし、下ろし
た左足を軸足にして右足を兄貴の側頭部めがけて70%ぐらいの力
で蹴り上げた。

「ぐあっ!!」

側頭部を蹴られた兄貴はその場でしゃがみこむ。

その時、パトカーのサイレンが聞こえた。
近くを巡回していたパトカーが駆けつけてくれたのだろう。

「兄貴!!」

バカのほうが兄貴に駆け寄る。

パトカーが来てしまったらナイフを持つてる兄貴は銃刀法で捕まっ
てしまう。

バカは兄貴に肩を貸すといそいそと帰ろうとした。

「大丈夫ですか!兄貴!この野郎、よくも兄貴を!!」

「やめろ!!」

「兄貴……」

「兄ちゃん。悪かったな」

「人の女に手を出さないでいただきたいです」

「ハハ。変な兄ちゃんだな」

「普通に嫌がってたら諦めるよ」

「肝に命じておくよ。帰るぞ！」

「待ってください！兄貴！」

兄貴とバカの関係も気になるが、今回は高倉さんが無事でよかった。振り向いて高倉さんを見ると、口を開けてポカーンとしていた。

栄養ドリンク男・忘れ物（後書き）

テコンドーかつこいいです。

あと数年後にはあのダサイ防具が一新されていることを願いたい
笑）

ジャンル変更しました。

コメディイから恋愛にかわりました。

でも恋愛コメディイとして続けていきます。

これからもよろしく願いますー

次回もお楽しみに！

豆乳女・驚愕の出来事

私はただ驚いていた。

変な男の人に捕まりそうになったと思つたら、佐々木くんが戻つて来て、開放されて安心したから戻つてきた理由を聞こうとしたら、男の一人がナイフ出してきて、佐々木くんがその人をボコボコにして、その男の人たちと仲良さげに話して・・・よくわからなかったけど、なんかドラマみたいな展開が目の前で次々と起こっていたので、私はただ驚くことしかできなかった。

「高倉さん。パトカー来ると面倒なので逃げましょう」

「は、はい」

私は言われるがままに走った。

丁寧な返事しかできなかった。

夜ご飯と一緒に食べた佐々木くとさっきまでキツクとかしていた人物と今日の前にいる佐々木くんが同一人物だとは思えなかった。

少し走つて、何個か角を曲がったところにあつた公園のベンチに佐々木くんは腰を下ろした。

私も佐々木くんの横に座った。

「ブハツ！なんで正座してるんですか！」

笑いながら私を見てくる。

あまりに気が動転していて、気づかないうちにベンチの上に正座してしまっていた。

「あ、ごめんなさい」

特に面白い返しをしてこない私を見て、佐々木くんは心配そうに私を見た

「大丈夫ですか？もしかしてどっか怪我してます？」

「いや、大丈夫。ちよつと・・・驚いちゃって」

「そうですか・・・」

沈黙。ただ静かな空気が流れた。

「もしかして引いてます？」

佐々木くんが口を開いた。

私は首を横に振った。

「よかったです。でも驚かせてすみませんでした。俺、高校のときテコンドーやってたんですよ。そのおかげでケンカ慣れしてるってゆーかなんてゆーか・・・」

私に説明してくれてる？

私はなんて返せばいいのかわからなくて、そのまま佐々木くんの話を聞いた。

「今日もあのあとアドレスとか電話番号とか聞きに忘れたことを思い出して戻ってきたんですよ」

そうだったんだ。そういえば連絡先教えてなかったんだっけ。

なんかずつと昔から知り合いだったような感覚だったからうつかりしてた。

「そしたら高倉さんが変な男に捕まってるじゃないですか！これは

「やばいと思って助けた訳ですよ」

あの時は確か戻ってきてくれたことに対して、「なんで？」っていう疑問と、「戻ってきてくれた！」っていう嬉しさと、「怖い」っていう気持ちでグチャグチャしてた。

「で、高倉さんがこっちに来たときに震えてて……。これはマズイと思って……」

震えてた？正直あまり覚えてない。

「高倉さん？大丈夫ですか？ってちょっと！」

慌ててカバンからポケットティッシュを取り出す佐々木くん。それを私に手渡してくる。

「俺ハンカチとか持ってないんでこれですみません」

「なんで……」

声を出して気づいた。

気づかないうちに泣いていたらしい。

佐々木くんからティッシュをもらうと涙を拭いた。

ついでに鼻もかんだ。

それを見ていた佐々木くんが、なんと大胆、と言って笑っていた。なんかちよつとイラつと来た。

「なんで笑ってるのさ」

「いや、まさかあんな豪快に鼻かむとは」

「人ごとだと思ってさ」

「……すみませんでした」

「なにさ。人ごとだと思つて・・・」

「いやだからごめんなさいって・・・」

「佐々木くんは何もわかつてないよっ！私がどんな気持ちで抵抗してたと思つてるのさっ！」

「・・・・・・・・」

今まで思っていた気持ちが溢れ出した。

佐々木くんは助けしてくれたのに、なぜか佐々木くんに当たってしまった。

「もしかしたらこのまま連れていかれちゃうんじゃないかとか、誰も来てくれなかったらどうなるのかとか思つてたのも佐々木くんにはわからないよっ！」

私は立ち上がった。

佐々木くんは黙つて私を見てる。

「だから佐々木くんが戻ってきてくれたときはどんなに安心したかなんて佐々木くんには全然わからないでしょ！」

私を見ている佐々木くんの目が少し大きくなったような気がした。また涙があふれる。それでも構わずに私は叫ぶ。

「すごい安心したんだから！ホツとしたんだから！それまですごい怖くて怖くて・・・」

それ以上は言葉にできなかった。泣きながら自分の足元を見てた。すると急に暗くなった。

気づいたときには佐々木くんは立ち上がって、私を抱きしめていた。

「すみませんでした。こんなに怖い思いをしていたとは思いませんでした。俺も高倉さんを守らなきゃの一心で精一杯でした。すみません」

何度も何度も謝る佐々木くん。

私は、その抱きしめられた腕の中で涙が枯れるまで泣いた。

豆乳女・驚愕の出来事（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

感想とか書いていただけると執筆意欲が高まる上に更新スピードも上がりそうです。

一応、次で一段落します。

章とつけて区切ろうかとも思ったんですが、今更なので特に付けません。

別にめんどくさいわけじゃないんだからね！！！！

というわけで次回もお楽しみに！

栄養ドリンク男・ドキドキ

高倉さんがこんなに怖がっていたなんて思わなかった。

それに俺を頼りにしてくれてたことが嬉しかった。

そして今、目の前で泣いているこの人のことを愛おしいと思った。

そう考えていたら、からだは勝手に動き、抱きしめていた。

優しく。壊れないように。それでいて力強く。

「すみませんでした。こんなに怖い思いをしていたとは思いませんでした。俺も高倉さんを守らなきゃの一心で精一杯でした。すみません」

高倉さんは自分の中のいろんな感情を、涙として流しているのかもしれない。

なら落ち着くまでこうしているのが今の俺の役目だと思った。

どれくらいそうしていただろうか。

少しの時間が長く感じた。高倉さんの涙は流れ出るのをやめた。

「ぐすつ。ん。もう大丈夫」

「ティッシュ使います？」

こくりと頷く高倉さんにベンチの上のティッシュを取って渡す。

一枚目で涙を拭く。二枚目で鼻をかむ。

「相変わらず大胆ですね」

「……うるさい」

目を真っ赤にして声もぐずぐずしてるけど、いつもの高倉さんに戻

ったようだ。

「落ち着いたみたいですね」

「ありがとうございます」

丁寧におじぎをする高倉さん。

つられておじぎをしてしまう。

「あ、いえ、お気になさらずに」

おじぎの後、顔を上げる時に高倉さんの顔を見ると、なにやら急に恥ずかしくなってきた。

今までの行動を思い返して見ると、とても大胆な自分が脳裏に浮かんできた。

「あ！その、なんていうか、その・・・」

「ん？何が？」

「いや、えーと・・・ほらーそのーなんてゆーかですね・・・」

「どうしたのさ」

「いや、あの、抱きしめちゃったりしたじゃないですか。それが今更恥ずかしくなってきたというかなんというか・・・」

「私は嬉しかった」

「すみませんでした！・・・え？」

「だから嬉しかったって言ったの」

「マジすか？」

「何回も言わせないでよ。恥ずかしい」

このままでは俺の精神力が持たない気がする。

こんな状態が続いたら告白してしまいそうだ。

しかし今告白したらつり橋効果で本音じゃないかもしれない。

そこらへんがちょっと怖い。
告白は別の日にしたい。
あ。

「そ、そうだ！連絡先聞いてもいいですか？」

「そうだった。忘れるところだった」

「あ。でも俺、スマホに変えたばかりで、アドレスとか入力してもらわないといけないんですけど」

「え！なにそれ。めんどくさい」

「そんなにズバツと言わないでくださいよ。じゃあ俺が入力するんで貸してください」

「変なところじゃないでよ？」

「いじりませんよ」

少し落ち着いてきた。

高倉さんもスマホなので、落とさないように借りる。

とりあえず今はこの入力に全身全霊をかけよう。

ポチポチポチポチ。

スマホ打ちづらいな！。

「ねえ、まだー？」

「そんなこと言われてもスマホ慣れてないんで勘弁してください」

「もう私やってあげようか？」

「あとちょっとですから待っていてくださいーさーいーよーっと。終わりましたよ」

スマホを高倉さんに返す。

「えーと。私が佐々木くんに送ればいいの？」

「そうです。そうしてもらわないと一方的に教えただけですもん」

「・・・・・・・・」

何やら黙り込んでしまった。
きつと文章を作っているのだろう。
スマホが震えた。画面を見るとメールが一件。
メールを開く。

『好きです』

この一言だけ書いてあった。

一瞬何事かと混乱するが、すぐに思い当たる。
目の前の人物を見ると、スマホを見ながらチラチラとこちらの様子を伺っている。

その人物に向かって話しかける。

「なんでそんな回りくどいことするんですか」

「な！私なりに趣向を凝らしたのに！」

「これ本心ですか？」

「どーゆーこと？」

「つり橋効果かもしれないですよ？」

「あの怖いドキドキと好きのドキドキを勘違いしちゃっつっ」

「それです」

「なにそれ。じゃあ逆に聞くけど、佐々木くんはどう思ってるのさ」

高倉さんは怒ってしまったみたいで、背中を向けてしまった。
これは答えないとマズイよな。
もう自分に正直になろう。

「俺は高倉さんが大好きです」

もう後戻りできないぞ！頑張れ俺！

「今日、いろんな高倉さんを見てきました。笑った高倉さん。恥ずかしがる高倉さん。怒った高倉さん。泣いてる高倉さん。この全部を見て俺は高倉さんのことを愛おしいと思いました。えーと・・・だから、つまり・・・付き合ってください！！」

言った！言ってやったぞ！！

今日は寝れないや！！

「私も」

「え？」

振り返って高倉さんが言う。

「私も好き。つり橋効果とかそんなの関係ない。とにかく好き」

「じゃあ・・・」

「ってゆーか私が先に言ったのに」

「・・・ええー！？メールはするんですよ」

「ずるくないよ。文明の知恵に頼ったんですー」

「全然上手いこと言えてないですからね！」

「アハハ。じゃあ改めてよろしくお願いします」

握手を求めてきた。

「こちらこそ」

その差し出された手を握ると、そのまま引き寄せて抱きしめた。

「やられると思った」

「超能力者ですか」

「シンクロしまくりなんだよ」

互いに顔を見つめ合い、まぶたを閉じた彼女にキスをした。

栄養ドリンク男・ドキドキ（後書き）

ここまでお読みいただきありがとうございます。

ここで一段落となりますが、まだまだ二人の物語は続いていきます。

ちょっと余談をば。

コメディーだと思っていた時期が僕にもありました。

しかしキャラ達（主に二人）が勝手に暴走した結果、こんな感じになっちゃいました。

まあこれはこれで良しかناと思ってます。

これからもこんな拙い文章でも、応援していただけると嬉しいです。次回からは閑話ということとでちょっと変則的にします。

というわけで次回もお楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9554x/>

豆乳女と栄養ドリンク男

2011年11月7日12時04分発行